

暗号戦に勝利をもたらした女性たち

小谷 賢

本書は、第二次世界大戦中に米国の歴史上初めて軍部に採用され、それぞれの能力と勤勉さによって高い評価を勝ち得たものの、長い間その存在を秘匿され続けてきた女性暗号解読者たち（コード・ガールズ）についてのノンフィクションである。本書には数多くの女性解読者が登場する上、日本人にはなかなか馴染みのない名前ばかりであるので、まずは本書内の口絵を参照されることをお勧めする。写真からは当時のコード・ガールズの様子や生活が臨場感をもって伝わってくるので、内容もよりスムーズに理解できるのではないだろうか。

米国が太平洋戦争を制することができた要因の一つに、日本陸海軍の暗号を解読できたことがよく挙げられる。そしてその際、必ず言及されるのが、ウィリアム・フリードマンやジョゼフ・ロシュフォートといった米軍きつての暗号解読者たちであるが、本書は米軍の暗号解読を陰で支え続けた、一万人以上にも上る無名の女性たちの活躍をできる限り詳しく描いたものである。米軍の暗号解読の裏にこれ程多くの女性がいたことは驚きであるが、彼女らは戦後も暗号解読に関わったことを家族にさえ秘匿し続けたため、その詳細については公に語られることはなかった。もちろん暗号解読は国家の情報活動の秘中の秘であるため、そのよう

な秘匿は致し方ない面もあるが、ようやく近年になり、米国家安全保障局（NSA）も戦前・戦中については機密を解除しつつある。そこで著者のライザ・マンディ氏は、暗号解読に関わった女性たちを主人公に据えた本書を執筆したのである。二〇一七年に原著が出版されるとその反響は大きく、特に自分の母や祖母が戦争中に暗号解読に従事していたことを初めて知ったという手紙やEメールが、米国中から数百通も届いたとのことである。

戦前の米国では、四年制大学を卒業している女性の割合は4%とかなり少なかった。当時、大学出の女性の仕事は薄給の教師ぐらいしかなく、大学を出ても良い仕事が見つからない、という状況であった。他方、軍部では優秀な暗号解読官が常に不足気味であった。暗号解読のためには数学や語学の素養のある（かつ口の堅い）人物が大量に必要となるため、誰でも良いというわけにはいかない。そこで陸軍の暗号解読の責任者であったウィリアム・フリードマンが目をつけたのが、大学出の教養ある女性の採用であった。フリードマンの妻、エリザベスも優秀な暗号解読者であったため、彼は女性にも暗号解読の素養があることを看破していたようである。軍に採用された多くの女性は暗号解読の専門的な教育をほどこされ、一流の暗号解読者として活躍することになる。その中の一人であるジュネビブ・マリー・グローチャンは暗号解読の才能を發揮し、日本の外交暗号「パープル」を解読する責任者として抜擢されるに至った。

一九四〇年九月二〇日、グローチャンは紙と鉛筆のみでパープル暗号を解読することに成功し、フリードマンを驚かせた。これは米国の暗号解読組織にとっては大きな到達点である。諸外国、特に英国から見れば米国の暗号解読組織は後発組であり、その能力には疑問符が付けられていたようであるが、パープル暗号解読の成功は、米国の暗号解読能力の高さを示すものとなった。当時英国の暗号解読組織はドイツ軍のエニグマ暗号の解読に専念していたため、日本のパープル暗号は解けないままだった。そのため米陸軍の通信情報

部は翌年二月に暗号解読者の一団を英国のブレッチリー・パークに派遣し、パープル暗号の解き方を伝授したのである。これは英国の暗号解読者たちにとっても新鮮な驚きとなり、英国は米国との暗号解読協力を真剣に模索するようになる。

こうして米英は日本の外交的な意図のみならず、日本の同盟国であるドイツの戦略情報も、暗号解読によって知ることができるようになる。米国でこの情報は「マジック」と名付けられ、陸海軍や国務省の幹部、さらにはコーデル・ハル国務長官にまで届けられていた。一九四一年七月の日本の南部仏印進駐に関する「マジック」情報は、米英両国にとって計り知れない価値があったと言ってよい。さらに海軍でもアグネス・ドリスコールのような部内で名を知られた女性暗号解読者が活躍しており、コード・ガールズは徐々にその能力を評価されつつあった。

そして日本海軍の真珠湾攻撃によって太平洋戦争が始まると、米陸海軍の暗号解読者たちは、日本陸海軍の暗号を解読することに全精力を注いだ。その中でも日本海軍の作戦暗号、JN-25を解読したことは、太平洋戦争の帰趨を決定付ける程の成果である。この暗号解読の中心的人物はジョゼフ・ロシュフォート大佐であるが、ロシュフォートは元々ドリスコールに教えを受けた身である。彼は有名な「AF」符号の謎を解き、日本海軍の攻撃目標がAF（ミッドウェー島）であることを見抜いたのである。その結果、一九四二年六月のミッドウェー海戦において、戦力的に劣勢だった米海軍は、日本海軍を打ち破るといって大勝利を収めることができた。ただし暗号解読の内情が『シカゴ・トリビューン』紙に誤って掲載されてしまったため、米海軍の幕僚たちは激怒したようである。本書では日本海軍が同紙の記事によって暗号解読の事実を察知していたかどうかは議論の対象となっている、と書かれているが、日本海軍が察知していた事実はないと言ってよいだろう。その後一九四三年四月一三日、今度はコード・ガールズの暗号解読によって、日本海軍連合

艦隊司令長官、山本五十六大将の南方視察の予定が割り出された。この情報を基に米陸軍の戦闘機部隊が待ち伏せを実行し、一八日に山本の搭乗する機体を撃墜したのである。

ただコード・ガールズの活躍も常に順風満帆というわけではなかった。男性中心の軍隊組織で働く女性性は差別だけではなく、身分差別にも直面していたのである。当時の女性は軍に入隊することができなかったため、民間人の身分で採用されていたが、どうしても職業軍人からは見下される運命にあった。そこでローズベルト政権は一九四二年五月に陸軍女性支援部隊法案、七月に海軍女性予備役法案を成立させることで、女性が正式に軍隊に参加する途を拓くことになる。これら法案によって、男性と同じように女性にも階級と制服が与えられ、士官採用ともなればいきなり少尉の階級からのスタートになった。当時、海軍の制服は有名なメイソッチャー製のものであったため人気を集めたというのは女性ならではのエピソードであろう。その代わり、彼女らは職業軍人として扱われるようになったため、男性隊員と同じように行軍や射撃訓練、身体の検診などもこなさなくてはならず、女性兵士としてアイデンティティを再構築されることになるが、徐々に女性たちは男性の牙城であった軍隊組織に馴染んでいき、能力によって評価されるようになる。本書によれば、戦争中に少佐にまで昇進した女性暗号解読者もいたそうであり、戦後、国家安全保障局のナンバー12にまで昇進することになるアン・カラクリステイも陸軍の暗号解読組織でその才能を開花させた一人である。

日本陸軍の暗号は海軍のものに比べると、かなり複雑なシステムを使用しており、それを解くのは容易ではなかった。戦後、日本側でも日本陸軍の暗号は解読されなかったと説明されることがあるが、結論から言えばそれは解かれていたのである。一九四三年四月六日から七日にかけて、米陸軍暗号解読組織に所属する男女七名のチームが日本陸軍の船舶暗号二号(2468コード)を初めて理論的に解読することに成功して

いる。これは日本陸軍の暗号を解読した初めての成功事例であり、暗号解読によって、日本本土から南方の陸軍部隊、さらには日本本土に物資を輸送するほぼすべての商船の航路が特定できるようになった。本書はこの成果をドイツ軍のエニグマ暗号解読やミッドウエーの勝利と並ぶほどの意義がある、と説明しているが、まさにその通りであろう。そしてこれを契機として、その他の日本陸軍の暗号も解かれることになり、その作業のためにより多くの女性解読者が採用されるようになっていく。本書第9章のタイトルに使用されているように、まさに「鉛筆を動かす女たちが日本の船を沈没させる」といった状況であったが、もちろん彼女たちは自らの行為によって、多くの命が失われることもよく認識していた。

このように米陸海軍の暗号解読組織は太平洋戦争の経験を通じて、世界でも指折りの能力を持つ組織へと成長したのである。そのため英国の暗号解読組織も米国との関係を重視するようになり、一九四三年五月に英米間でBRUSA（ブルサ）協定を結ぶことで、英側も惜しみなくドイツ軍のエニグマ暗号の解読方法を米国に伝授するようになる。同年中には英国暗号解読組織の秘中の秘ともいうべき解析機「ボンブ」が米国側に提供されることで、米国は英国と等しい暗号解読能力を得たのである。この「ボンブ」の運用の裏にも多くの女性の活躍があったことは言うまでもない。

一九四五年八月一日、日本政府はスイスの加瀬俊一公使に対して、連合国からのポツダム宣言を受け入れ、停戦に同意する旨の暗号通信を送った。この通信は即座に米側に傍受され、解読されることになるが、その作業を担当したのも女性暗号解読者、バージニア・アダーホールドであった。彼女は米国人の誰よりも先に日本の降伏の意思を確認することになったので、その時の興奮は計り知れないものがあつたのだろう。この時ばかりは解読内容を他言してはならない、との規則は守られなかったようである。そしてその日の内に、陸海軍の暗号解読組織に所属する数千人もの女性が街に出て、戦争の終結を祝ったという。ただし平穩

は長く続かなかつた。その後、陸海軍の暗号解読組織は国家安全保障局に引き継がれ、そこでも女性暗号解読者たちが今度はソ連の暗号解読の任務に就くことになり、そこで活躍した多くの女性が上級職にまで昇進することになった。

これまで米軍では男性の暗号解読者が日本軍の暗号を傍受・解読していたような印象があるが、本書を紐解くとそれが全くの思い込みであり、暗号解読活動という陰の仕事が実は多くの女性によって担われてきた事実がわかる。そして能力のある女性が男性中心の組織の中で認められていく過程はとて興味深い。本書はそのような歴史に埋もれた事実を掘り起こし、それを一冊の書物として我々読者に提示してくれているのである。